様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２２５７

研究課題名（和文）アリストテレス倫理学の再定位を通した新たな自然主義的倫理学の構想

研究課題名（英文）Rethinking Aristotelian ethics towards a new naturalism

研究代表者
近藤　智彦（Kondo, Tomohiko）

北海道大学・文学研究院・准教授

研究者番号：３０４２２３８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,300,000円

研究成果の概要（和文）：アリストテレス倫理学そのものの解釈はもとより、古代におけるアリストテレス哲学の受容、現代の倫理学や政治哲学における新アリストテレス主義など、多岐にわたるトピックに関して、本研究プロジェクトは多くの論文や単著の出版に結実したほか、公開研究会や書評会および国内学会・国際学会でのワークショップやパネルセッションを企画したことで、アリストテレス倫理学を軸とした日本の古代哲学研究の中心的な発信拠点の一つとして機能した。また、本プロジェクトのメンバーを中心として、日本におけるアリストテレス哲学の受容史と研究動向に関する英語論文集の準備を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究プロジェクトはその多岐にわたる成果を通して、「自然本性」概念の理解がアリストテレス倫理学を適切に解釈し応用するにあたっての鍵となることをあらためて確認するとともに、「自然本性」概念の相異なる理解にもとづく複数の「アリストテレス主義」についてその可能性と問題点の両方を詳細に検討するという課題に対して着実な貢献を果たした。また本プロジェクトは、アリストテレス倫理学をはじめとする古代哲学研究に関する多くの企画を通して、日本における古代哲学研究の活性化と国際化に貢献した。

研究成果の概要（英文）：On a wide range of topics, including the interpretation of Aristotelian ethics itself, the reception of Aristotelian philosophy in antiquity, and the neo-Aristotelianism in contemporary ethics and political philosophy, this research project has produced many articles and monographs, organised a number of public seminars and joint book reviews, as well as workshops and panels at national and international conferences, thus serving as one of the main centres for the study of ancient philosophy in Japan, with Aristotle's ethics at its core. In addition, members of the project have taken the lead in preparing an English-language volume on the reception history and recent scholarship on Aristotle's philosophy in Japan.

研究分野：古代ギリシア・ローマ哲学、倫理学

キーワード：倫理学　哲学史　西洋古典　アリストテレス　自然主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

アリストテレスの倫理学は、倫理学という学自体のあり方を定めたと言えるその歴史的意義にとどまらず、西洋哲学史全体にわたって倫理学とはいかなる営みかを考える際に常に立ち返るべき古典として機能してきた。その重要性は現代でも変わらないどころか、ここ半世紀ほどは世界的にアリストテレス倫理学ブームが続いてきた。そのブームを牽引してきたのは、徳倫理学（virtue ethics）の隆盛である。徳倫理学は義務論および帰結主義（功利主義）に並ぶ規範倫理学の一理論としての位置をいまや獲得するに至ったが、その徳倫理学の典型とされてきたのがアリストテレスなのである。このようなアリストテレス倫理学に対する注目が、古代哲学史研究全体の活性化をもたらしただけではなく、古代哲学史研究と現代倫理学研究を架橋する多くの豊かな研究を生んできたことは事実である。日本の状況を見ても、本研究メンバーの一部が関わった近年の成果として、新しいアリストテレス全集や個々の著作の日本語訳、アリストテレス哲学や徳倫理学に関する研究書やその日本語訳などがある。

しかし、アリストテレス倫理学の研究は根本的な再検討を迫られている。古代ギリシア・ローマの倫理学と言えばアリストテレス、アリストテレスと言えば徳倫理学、という従来の研究を支配してきた定型的な理解が、アリストテレス倫理学の歴史的解釈とその現代的意義の評価を一面的なものに歪めてきたことが、次第に明らかになってきたからである。古代哲学史研究においては、Julia Annas, *The Morality of Happiness*, 1993 を嚆矢としてアリストテレス倫理学をヘレニズム諸学派の倫理学理論と比較検討する研究が進められた結果、徳倫理学はアリストテレスに特有のものとは言えないとする見方が今や研究者の共通見解となっている。現代倫理学の研究動向に目をやると、徳倫理学の独自の展開のなかで非アリストテレス的なアプローチが現れたり（例えばアリストテレスよりもヒュームなどに依拠する Michael Slote や Christine Swanton らの立場）、義務論や功利主義（あるいはカントやＪ・Ｓ・ミルなどの倫理学説の解釈）においても徳倫理学の洞察を取り入れる動きが進んだりするなど、もはや徳倫理学はアリストテレスの専売特許とは言えない状況になっている。

こうした現状を踏まえて改めてアリストテレス倫理学の特徴を考え直すとき、そのもう一つの重要な柱と言うべきものとして浮かび上がるのが、人間本性にもとづく自然主義という側面である。最近の古代哲学史研究においては、とりわけ Brad Inwood, *Ethics After Aristotle*, 2014 が、古代アリストテレス（主義）倫理学の特徴を徳倫理学ではなく一種の自然主義に見出す解釈を提案していて注目に値する。これに対して現代倫理学の研究においては、アリストテレス倫理学の自然主義をどのように評価するかが、研究者の間で大きく見解の分かれる争点となっている。Bernard Williams がアリストテレス倫理学を高く評価しつつもその「形而上学的目的論」を批判したのに対して、現代の新アリストテレス主義者 Martha Nussbaum は形而上学的側面を脱色しつつもなお人間本性の概念を活用しようとしている。さらには、積極的に生物学的人間本性の概念を彫琢して現代版「規範的自然主義」を打ち出そうとする Philippa Foot や Michael Thompson などの試みも見られる。こうした論争の背景には、アリストテレスに従って「自然本性」や「人間本性」の概念に依拠すること自体が、現代では問題含みのものとなっているという意識がある。奴隷制や性差を自然本性的なものとみなしたアリストテレスの議論が実際に西洋思想に長く影を落としたことからも分かるように、特定の「自然本性」を普遍的であるかのようにみなすことが様々な抑圧につながる危険性も無視できない。にもかかわらず、最近のモラル・サイコロジーの興隆に見られるように、科学的自然観と日常的人間観の狭間で「人間本性」をどのように捉え直すべきなのか、そしてそれが倫理学にいかなる含意をもたらすのか、こうした問題の考察は現代倫理学にとって急務と言える。

２．研究の目的

上記の現状を踏まえつつ、われわれはなおアリストテレスに従って「自然本性」や「人間本性」を語りうるのか、語りうるとすればどのような仕方においてか――アリストテレス倫理学を、その都合のよい面だけ取り上げて表面的に用いるのではなく、その根幹を捉えた上で真に現代に活かすためには、この困難な問いに立ち向かうことが求められる。その上で本研究は、科学的自然観と日常的人間観との狭間で揺れ動いている現代倫理学に対して新たな光を投げかける自然主義的倫理学の構想を打ち出すことを目指す。この課題に取り組むために、本プロジェクトは、アリストテレスの自然主義的倫理学について、アリストテレス哲学全体および古代倫理学史の中での位置づけを改めて検討する歴史的再定位と、現代倫理学における受容を踏まえてその現代的意義を考察する現代的再定位との、二つの柱に沿って研究を進めていく。

本プロジェクトは、相澤、稲村、佐良土、立花、茶谷らアリストテレス倫理学プロパーの研究者に加え、岩田、高橋、松浦ら倫理学以外の分野のアリストテレス研究に主に携わってきた者、そしてヘレニズム・ローマ哲学の歴史的研究を進めてきた近藤という、背景の異なる研究者が結集し、それぞれの強みを発揮しつつ共同で取り組んでいく。世界的にも、アリストテレス（特に『ニコマコス倫理学』）のみを取り出してその現代的意義を見出そうとするタイプの研究と、アリストテレス哲学全体や古代倫理学史を広く視野に収めた歴史的アプローチの研究との間の架

橋は十分に進んでいるとは言えず、われわれの共同研究はそのギャップを埋めるものとなることを狙っている。また、メンバーのなかには海外で学位を取ったりすでに多くの英語論文を発表したりしている者からそうではない者までいるが、切磋琢磨して研究成果の世界への発信を試み、本研究を通して、アリストテレス倫理学を軸とした日本の古代哲学研究の、世界に向けての一つの発信拠点を形成することも目指す。

３．研究の方法

(1) 各自が個別研究を進めつつ、定例研究会を開いて意見を交換しながら、成果を順次まとめて論文・著書として発表していく。

(2) 国内外で公開研究会や書評会を開催するなど、アリストテレス倫理学を軸とした日本の古代哲学研究の活性化と国際化に貢献する企画をおこなう。

(3) 国内外の学会でのワークショップやパネルセッションを、本研究メンバーを中心に企画して開催する。

(4) その成果を英文の論文集にまとめて出版を目指す。

４．研究成果

(1) 本研究プロジェクトに関わった人々の手によって多くの個別研究が世に出されたことを、第一にして最大の研究成果として挙げたい。日本のアリストテレス研究史にその名が刻まれるべき主な業績だけでも、相澤が訳者の一人となった新しいアリストテレス全集中の『政治学』の翻訳（2018）、稲村による *History of Political Thought* 誌への掲載論文（2019）、茶谷による単著（2019）などがある。

(2) 次に、研究期間中に国内外で以下のような公開研究会や書評会を開催したことにより、アリストテレス倫理学を軸とした日本の古代哲学研究の中心的な発信拠点の一つとして機能した。

①なかでも特筆したいのは、日本の研究者が出版した古代哲学研究書の書評会を三回にわたって開催した点であり、いずれもその記録は後日公刊されている。
・研究分担者の稲村が 2015 年 にケンブリッジ大学出版局から出版したアリストテレス政治哲学に関する英文研究書 *Justice and Reciprocity in Aristotle's Political Philosophy* の書評会を、第 173 回 PHILETH セミナー＆第 7 回 PAP 研究会「アリストテレス＆プラトン政治哲学とその周辺」の一環として 2017 年 8 月 31 日・9 月 1 日に北海道大学で開催した。書評者として石野敬太、川本愛、齋藤拓也、金山準の各氏の協力を得た。
・川本愛『コスモポリタニズムの起源――初期ストア派の政治哲学』（京都大学学術出版会、2019）の書評会を、著者を招いて 2019 年 5 月 26 日に早稲田大学で開催した。書評者としては研究代表者の近藤と研究分担者の稲村に加えて、安田将、兼利琢也の各氏の協力を得た。
・酒井健太朗『アリストテレスの知識論――『分析論後書』の統一的解釈の試み』（九州大学出版会、2020）の書評会を、著者を招いて 2021 年 3 月 6 日にオンラインで開催した。書評者としては、研究分担者の高橋、松浦に加えて、岩田直也、斎藤憲、飯田隆の各氏の協力を得た。

②国内では、第 8 回 PAP 研究会「哲学史の隠れた鍵としてのアフロディシアスのアレクサンドロス」および「アリストテレスと現代(1)：自然主義と哲学方法論をめぐって」を、前者にはアダム・タカハシ、安田将、渡邉真代、西村洋平、坂本邦暢の各氏、後者には植原亮氏を招き、2018 年 3 月 2 日・3 日にそれぞれ東洋大学と早稲田大学で開催した。本プロジェクトが目指すアリストテレス倫理学の歴史的再定位と現代的再定位という両軸について、研究の始動を内外に示すよい機会となった。

③国際的な企画としては、2018 年 5 月に、研究協力者のブラッド・インウッド教授（米国・イェール大学）を招聘し、5 月 12 日に北海道大学でワークショップ（Workshop on Stoicism）を開催した（研究代表者の近藤のほか発表者として西村洋平と安田将の各氏の協力を得た）。インウッド教授にはさらに、5 月 14 日に東京大学でセネカ『倫理書簡集』65 の講読セミナーおよびマルクス・アウレリウスに関する講演を、5 月 18 日に京都大学でエピクテトスに関する講演をそれぞれ行っていただき、多くの研究者や学生に対して古代ギリシア・ローマ哲学研究の最先端に触れる機会を提供することができた。また、2020 年 2 月 20 日には、安田将と岩田直也の両氏を招いて古代哲学のワークショップをオランダ・ユトレヒト大学で開催し、日本の研究者とオランダの研究者のよい交流の機会となった。

(3) また、国内学会・海外学会でのワークショップやパネルセッションを、本研究メンバーが中心となって以下のように計三回企画した。

①2018 年 10 月 5 日に日本倫理学会第 69 回大会（玉川大学）で公募ワークショップ「アリストテレス倫理学における「自然主義」再考」（実施責任者・近藤）を行った。高橋「アリストテレスの方法論からみた自然主義的倫理学の可能性の検討」、茶谷「アリストテレス倫理学における魂理解とその基礎づけをめぐる一考察」、佐良土「徳の相対性の問題に対する自然主義からの再検討」の三提題にもとづき、「自然」概念の多義性、古代と現代の「自然主義」の差異と重なり、アリストテレス倫理学の現代的意義など多岐に亘る議論が交わされ、本プロジェクトのいわば中間報告としてよい機会となった。

②2019 年 5 月 19 日に日本哲学会第 78 回大会（首都大学東京）で公募ワークショップ「政治的な事柄を〈いま〉哲学するということ：アリストテレス『政治学』を再読する意義の検討を手がかりとして」（オーガナイザー・立花）を行った。研究分担者の相澤と稲村に福間聡、玉手慎太郎の両氏を加えた四名の提題を受けて、アリストテレス哲学の現代的意義と時代的制約などをめぐって刺激的な意見交換がなされた。その報告は後日公刊されている。

③2019 年 7 月 7 日に FIEC/CA 2019（第 15 回国際西洋古典学連合大会／Classical Association 年次大会・ロンドン）で、研究分担者の立花をオーガナイザーとしたパネルセッション ‘Rethinking Nature and Naturalism in Aristotle’s Ethics’ を行った。研究分担者の立花と岩田に文景楠、北郷彩の両氏を加えた四名の提題を受けて、アリストテレス倫理学における自然概念と自然主義の問題をめぐって多岐に亘る議論が交わされた。また、関連企画として、同じ FIEC/CA 2019 で 7 月 6 日に、近藤をオーガナイザーとし、勝又泰洋、中谷彩一郎、Luciana Cardi の各氏を提題者に加えたパネルセッション ‘We are the Greeks/Romans: ‘Anatopistic’ Classical Receptions in Modern Japan’ を行った（また、その準備として 5 月 25 日にはワークショップ「日本における西洋古典受容」が慶應義塾大学で開かれた）。なお、当初の計画ではプロジェクト最終年度となるはずだった 2020 年度に国外から研究者を招聘して総括シンポジウムを開催する予定であったところ、研究代表者のサバティカル研修などの事情を考慮した結果、国内で行う総括研究会と国外で行う国際ワークショップに分けて開催することに決まっていたが、その計画もパンデミックにより変更を余儀なくされた。国際ワークショップに関しては、繰越により次年度以降の開催を試みたが、パンデミックの影響が残るなか研究推進上の時宜を逸したことも考慮し、最終的に開催を断念せざるをえなかったのは残念である。

(4) 上記のようにパンデミックによる影響を受けたとはいえ、繰越を含めた最終年度となる 2022 年度までの間に、本研究プロジェクトに関わった人々を中心として、日本におけるアリストテレス受容史と研究動向に関する英語論文集の準備を具体化に進め、出版社に提出する直前の段階にまで辿り着いたことは喜ばしい。本論文集は、アリストテレスの日本語訳の問題、日本の哲学者によるアリストテレス受容、日本におけるアリストテレス研究の新しい動向、日本におけるアリストテレス哲学の応用の試み、というトピックからなる予定である。

以上のように本研究プロジェクトの成果は、アリストテレス倫理学そのものの解釈はもとより、古代におけるアリストテレス哲学の受容、現代の倫理学や政治哲学における新アリストテレス主義、日本におけるアリストテレス哲学の受容と応用の試みなど、多岐にわたっている。その多くにおいて「自然本性」という概念が問題の焦点となることが確認されたことは、この概念の理解がアリストテレス倫理学を適切に解釈し応用するにあたっての鍵となることをあらためて裏付けていると言えよう。しかし、アリストテレスの「自然本性」概念に対して、アリストテレス倫理学の解釈と応用に関する諸問題を一挙に解消するような唯一の決定的な解釈を与えることは、おそらく困難であろう。むしろ古代哲学研究者に求められるのは、「自然本性」概念の相異なる理解にもとづく複数の「アリストテレス主義」について、その可能性と問題点の両方を詳細に検討した上で、今後に活かすべく整理しておくという着実な仕事ではないか。当初目指した「新たな自然主義的倫理学の構想」には遠く及ばないかもしれないが、少なくともこのような着実な仕事については、本プロジェクトが生み出した成果のそれぞれが確かな貢献を果たしたと信じている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　11件）

１．著者名 Kazuya Matsuura	４．巻 9
２．論文標題 Time, the Present, and Potentiality in Aristotle	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国際哲学研究	６．最初と最後の頁 51-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 文景楠	４．巻 100
２．論文標題 思考の全体と原理	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東洋文化	６．最初と最後の頁 5-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079034	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川本愛，安田将，稲村一隆，兼利琢也，近藤智彦	４．巻 28
２．論文標題 書評会ノート：川本愛『コスモポリタニズムの起源――初期ストア派の政治哲学』（京都大学学術出版会，2019	５．発行年 2019年
３．雑誌名 西洋古典研究会論集	６．最初と最後の頁 85-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋祥吾	４．巻 43
２．論文標題 技術者倫理における徳と創造性	５．発行年 2019年
３．雑誌名 徳山工業高等専門学校研究紀要	６．最初と最後の頁 21-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高橋祥吾	4．巻 17
2．論文標題 アリストテレス『弁論術』におけるストイケイオン	5．発行年 2020年
3．雑誌名 比較論理学研究	6．最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Tomohiko Kondo	4．巻 2(3)
2．論文標題 The birth of Stoic freedom from Plato's Republic	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Proceedings of the XXIII World Congress of Philosophy	6．最初と最後の頁 43-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5840/wcp232018231350	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kazutaka Inamura	4．巻 40
2．論文標題 Scientific Classification and Essentialism in the Aristotelian Typology of Constitutions	5．発行年 2019年
3．雑誌名 History of Political Thought	6．最初と最後の頁 196-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋祥吾	4．巻 70
2．論文標題 アリストテレス「オルガノン」における方法とピュシス	5．発行年 2018年
3．雑誌名 哲学(広島哲学会会誌)	6．最初と最後の頁 87-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松浦和也	4．巻 16
2．論文標題 知性の離存性について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ギリシャ哲学セミナー論集	6．最初と最後の頁 33-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松浦和也	4．巻 53
2．論文標題 人間は生まれつき知ることを欲するのか―アリストテレス『形而上学』の最初の文について―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 白山哲学	6．最初と最後の頁 67-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 文景楠	4．巻 第180号
2．論文標題 書評（國分功一郎『中動態の世界：意志と責任の考古学』）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東北学院大学教養学部論集	6．最初と最後の頁 117-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 相澤康隆	4．巻 第36号
2．論文標題 アリストテレスの中庸説の擁護	5．発行年 2019年
3．雑誌名 人文論叢(三重大学人文学部文化学科紀要)	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 近藤智彦	4．巻 32
2．論文標題 運と幸福―古代と現代の交錯	5．発行年 2017年
3．雑誌名 社会と倫理	6．最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15119/00002701	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石野敬太、川本愛、齋藤拓也、金山準、稲村一隆	4．巻 143
2．論文標題 アリストテレスの政治哲学における正義と相互性：書評会ノート	5．発行年 2017年
3．雑誌名 教養諸学研究	6．最初と最後の頁 129-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松浦和也	4．巻 15
2．論文標題 知性の無理解―アリストテレスのアナクサゴラス評―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 秀明大学紀要	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 茶谷直人	4．巻 45
2．論文標題 アリストテレス芸術論における快と自然美――「模倣されたもの」の受容による快をめぐって	5．発行年 2018年
3．雑誌名 神戸大学文学部紀要	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Keiichi Iwata	4．巻 40
2．論文標題 Particular Substances in the Early Chapters of Metaphysics Z	5．発行年 2018年
3．雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻哲学コース『哲学世界』	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計33件（うち招待講演　1件／うち国際学会　14件）

1．発表者名 Tomohiko Kondo
2．発表標題 Alexander of Aphrodisias’ ≪De fato≫: Problems of coherence reconsidered
3．学会等名 Dottorato di ricerca in Filosofia, Corso specialistico “Ricerche di filosofia antica e medievale”: Critical Perspectives on Alexander of Aphrodisias（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 Tomohiko Kondo
2．発表標題 The Hymn to Apollo arranged for traditional Japanese gagaku instruments
3．学会等名 Presences de l'Antiquite; classique dans le Japon contemporain（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Tomohiko Kondo
2．発表標題 The principle of ‘doing one’s own’ in the Platonic-Stoic tradition
3．学会等名 Colloquium Geschiedenis van de Filosofie, Universiteit Utrecht（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Tomohiko Kondo
２．発表標題 The Hymn to Apollo arranged for traditional Japanese gagaku instruments
３．学会等名 FIEC / CA 2019（15th Congress of the Federation internationale des associations d’etudes classiques / Classical Association annual conference 2019）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川本愛，安田将，稲村一隆，兼利琢也，近藤智彦
２．発表標題 川本愛『コスモポリタニズムの起源―初期ストア派の政治哲学』著者による紹介、コメント、著者からの応答
３．学会等名 川本愛『コスモポリタニズムの起源―初期ストア派の政治哲学』（京都大学学術出版会、2019）書評会
４．発表年 2019年

１．発表者名 近藤智彦
２．発表標題 The Hymn to Apollo arranged for traditional Japanese gagaku instruments
３．学会等名 ワークショップ「日本における西洋古典受容」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiichi Iwata
２．発表標題 Happiness and Wisdom in Aristotle
３．学会等名 FIEC / CA 2019（15th Congress of the Federation internationale des associations d’etudes classiques / Classical Association annual conference 2019）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐良土茂樹
２．発表標題 善きコーチへの学び――「思慮」と「技術」の観点から
３．学会等名 日本倫理学会第70会大会ワークショップ「徳倫理学ワークショップ５　スポーツ・体育と徳育」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shigeki Sarodo
２．発表標題 Phronesis as Practical Wisdom for Coaches
３．学会等名 12th International Council for Coaching Excellence Global Coach Conference 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kyungnam MOON
２．発表標題 Form and end in Physics II 7
３．学会等名 FIEC / CA 2019（15th Congress of the Federation internationale des associations d’etudes classiques / Classical Association annual conference 2019）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Naoto Chatani
２．発表標題 Euthanasia and Aristotle
３．学会等名 The 9th International Conference: Applied Ethics and Comparative Thought in East Asia（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Koji Tachibana
２．発表標題 Methodological Naturalism in Aristotle’s (Virtue) Ethics
３．学会等名 FIEC / CA 2019（15th Congress of the Federation internationale des associations d’etudes classiques / Classical Association annual conference 2019）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Aya Kitago
２．発表標題 The Categories and Aristotelian naturalism in ethics
３．学会等名 FIEC / CA 2019（15th Congress of the Federation internationale des associations d’etudes classiques / Classical Association annual conference 2019）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 松浦和也
２．発表標題 「時間と可能態」（ワークショップ：時間と時間の中と外―アリストテレスとベルクソン―）
３．学会等名 哲学会第58回研究発表大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 相澤康隆
２．発表標題 アリストテレスの奴隷論：『政治学』の悪名高い議論を読み直す（ワークショップ（実施責任者　立花幸司）：政治的な事柄をいま哲学するということ――アリストテレス『政治学』を再読する意義の検討を手がかりとして）
３．学会等名 日本哲学会第78回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 稲村一隆
２．発表標題 政体分類の方法論と本質主義（ワークショップ（実施責任者　立花幸司）：政治的な事柄をいま哲学するということ――アリストテレス『政治学』を再読する意義の検討を手がかりとして）
３．学会等名 日本哲学会第78回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tomohiko Kondo
２．発表標題 'The principle of 'doing one's own' after Plato
３．学会等名 XXIV World Congress of Philosophy（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tomohiko Kondo
２．発表標題 'The principle of 'doing one's own' in the Platonic-Stoic tradition
３．学会等名 International Symposium: Plato, his Dialogues and Legacy（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋祥吾
２．発表標題 アリストテレスの方法論からみた自然主義的倫理学の可能性の検討
３．学会等名 日本倫理学会第69回大会ワークショップ 「アリストテレス倫理学における「自然主義」再考」
４．発表年 2018年

１．発表者名 松浦和也
２．発表標題 運動とそれに続くもの
３．学会等名 プラトン、アリストテレスにおける時空と運動および論証知　―新著4冊+1博士論文書評会―
４．発表年 2018年

１．発表者名 松浦和也
２．発表標題 知性の離存性について
３．学会等名 第22回ギリシャ哲学セミナー
４．発表年 2018年

１．発表者名 松浦和也
２．発表標題 人間は生まれつき知ることを欲するのか？―アリストテレス『形而上学』の最初の文について―
３．学会等名 白山哲学会研究発表大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 茶谷直人
２．発表標題 アリストテレス倫理学における魂理解その基礎づけをめぐる一考察
３．学会等名 日本倫理学会第69回大会ワークショップ　「アリストテレス倫理学における「自然主義」再考」
４．発表年 2018年

１．発表者名 Naoto CHATANI
２．発表標題 Aristotle and Bioethics
３．学会等名 第2回 MST International Workshop（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐良土茂樹
２．発表標題 徳の相対性の問題に対する自然主義からの再検討
３．学会等名 日本倫理学会第69回大会ワークショップ 「アリストテレス倫理学における「自然主義」再考」
４．発表年 2018年

１．発表者名 松浦和也
２．発表標題 アリストテレス的自然主義の形成－自然物と人工物の場合－
３．学会等名 日本科学哲学会第50回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 立花幸司
２．発表標題 アリストテレスと現代自然主義
３．学会等名 日本科学哲学会第50回大会　ワークショップ「現代自然主義とアリストテレス」
４．発表年 2017年

１．発表者名 Tomohiko Kondo
２．発表標題 Between the self-caused and the uncaused: the "free-will" problem in Hellenistic philosophy
３．学会等名 International Conference: Self Between Consciousness and Non-being（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 近藤智彦
２．発表標題 ディオゲネス・ラエルティオスにおける異伝導入の”ギリシャ文字”について
３．学会等名 第16回フィロロギカ研究集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 高橋祥吾
２．発表標題 アリストテレス「オルガノン」におけるピュシスの役割
３．学会等名 広島哲学会第68回学術発表大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐良土茂樹
２．発表標題 アリストテレス倫理学に依拠したコーチの「幸福」
３．学会等名 第39回日本体育・スポーツ哲学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 近藤智彦
２．発表標題 アレクサンドロスの自由意志論はどうして評判が悪いのか
３．学会等名 第8回PAP研「哲学史の隠れた鍵としてのアフロディシアスのアレクサンドロス」
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋祥吾
２．発表標題 アリストテレスの方法論におけピュシス――「オルガノン」での用例を中心にして
３．学会等名 第8回PAP研
４．発表年 2018年

〔図書〕　計10件

１．著者名 近藤智彦	４．発行年 2020年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 288
３．書名 世界哲学史2――古代II 世界哲学の成立と展開（伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留編、第2章「ローマに入った哲学」(37-62)を分担執筆）	

１．著者名 佐良土茂樹	４．発行年 2019年
２．出版社 培風館	５．総ページ数 223
３．書名 グッドコーチになるためのココロエ（平野裕一、土屋裕睦、荒井弘和（共編）、「日本のコーチングの今」(1-10)を分担執筆）	

１．著者名 佐良土茂樹	４．発行年 2020年
２．出版社 日東書院	５．総ページ数 208
３．書名 バスケットボールが科学で強くなる（小谷究、柏倉秀徳（監修）、「そもそも科学とは何か？」、「科学からプレーを考える」、「アスリートのためのストア哲学」、「コーチング哲学を持つ」(24-27，174-177，188-199)を分担執筆）	

１．著者名 茶谷直人	４．発行年 2019年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 216
３．書名 アリストテレスと目的論――自然・魂・幸福	

１．著者名 近藤智彦	４．発行年 2019年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 348
３．書名 『英雄伝』の挑戦　新たなプルタルコス像に迫る(小池登・佐藤昇・木原志乃編，第4章「〈受容〉する女性――プルタルコスの女性論・結婚論の哲学的背景」(133-160)を分担執筆)	

１．著者名 Tomohiko Kondo	４．発行年 2018年
２．出版社 Palgrave Macmillan	５．総ページ数 292
３．書名 The Realizations of the Self (Andrea Altobrando, Takuya Niikawa, Richard Stone (eds.), "Stoic happiness as self-activity" (167-183)を分担執筆)	

1．著者名 ジュリア・アナス(相澤康隆訳)	4．発行年 2019年
2．出版社 春秋社	5．総ページ数 376
3．書名 徳は知なり：幸福に生きるための倫理学	

1．著者名 Tomohiko Kondo	4．発行年 2017年
2．出版社 Academia Verlag	5．総ページ数 370
3．書名 For a Skeptical Peripatetic: Festschrift in Honour of John Glucker (Studies in Ancient Moral and Political Philosophy, vol. 3) (Yosef Z. Liebersohn, Ivor Ludlam, Amos Edelheit (eds.), "Plato against Plato? Carneades' anti-Stoic strategy" (177-191)を分担執筆)	

1．著者名 近藤智彦	4．発行年 2017年
2．出版社 白水社	5．総ページ数 417
3．書名 『メルロ＝ポンティ哲学者事典　第一巻：東洋と哲学・哲学の創始者たち・キリスト教 と哲学』（加賀野井秀一，伊藤泰雄，本郷均，加國尚志監訳，「補記（ヘレニズム・ローマ期）」(289-294)を分担執筆）	

1．著者名 相澤康隆（訳）	4．発行年 2018年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 595
3．書名 『アリストテレス全集17　政治学、家政論』(内山勝利，神崎繁，中畑正志編）を神崎繁，瀬口昌久と共訳	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	茶谷　直人 (Chatani Naoto) (00379330)	神戸大学・人文学研究科・教授 (14501)	
研究分担者	岩田　圭一 (Iwata Keiichi) (00386509)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	高橋　祥吾 (Takahashi Shogo) (10758337)	徳山工業高等専門学校・一般科目・准教授 (55503)	
研究分担者	立花　幸司 (Tachibana Koji) (30707336)	千葉大学・大学院人文科学研究院・助教 (12501)	
研究分担者	相澤　康隆 (Aizawa Yasutaka) (40647129)	山梨大学・大学院総合研究部・准教授 (13501)	
研究分担者	佐良土　茂樹 (Sarodo Shigeki) (40711586)	日本体育大学・体育学部・准教授 (32672)	
研究分担者	稲村　一隆 (Inamura Kazutaka) (40726965)	早稲田大学・政治経済学術院・准教授 (32689)	
研究分担者	松浦　和也 (Matsuura Kazuya) (30633466)	東洋大学・文学部・教授 (32663)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会	開催年
Workshop Ancient Philosophy (Utrecht University, 20 February 2020)	2020年～2020年
国際研究集会 Workshop on Stoicism (Hokkaido University, 12 May 2018)	開催年 2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関